

持続するノコギリ屋根

— 桐生新町伝統的建築物群保存地区におけるパブリック空間の提案 —



00 設計趣旨

地域のタイポロジーとしての「ノコギリ屋根」は今後どのように活用していくべきだろうか？

本設計では、群馬県桐生市の象徴的な歴史的資源である「ノコギリ屋根」を現代的な要求のもと活用しつつ、単に「保存」するのではなく、**形態の「発展」をもとめた持続**を試みたい。歴史が、その発生当時の状況において意味を持つだけではなく「同時代的な問題に対しても実用的な意味を持つ」という意義な事態が生じるためには、現在の地点からその歴史的物なり事象が有する実用性を見出す努力が欠かせない。タイポロジーに対してもそのような態度で取り組むことで新たなかたちをもたせていながら未来に持続する有機的な歴史線が描けるのではないだろうか。

歴史へのまなざし

01 実践的な歴史観

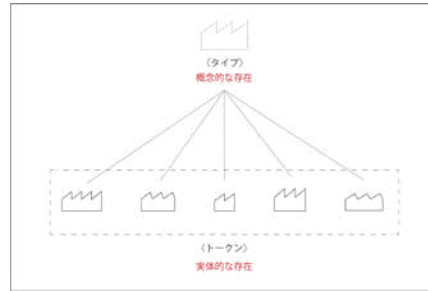
建築とは歴史の産物である。したがっていかに歴史と向き合うかという問題は設計者にとって重要な問題である。では今日までに蓄積されてきた歴史を設計者はどのように扱い、設計に落とし込むべきなのだろう。これに対して私は、**実践的な歴史観**を持つことが有効だと考えた。換言すると、過去の事物の現代における有効性を探るような視点である。過去の事物をその当時の状態で保存することに目的を定めるのではなく、現代の人々や社会の要求に沿って活用することに焦点を置く立場が現代において必要ではないかと考えたからである。過去の蓄積によって、私たちの目の前には膨大な歴史が資源として存在している。そうした**歴史的資源を「同時代的な」ひとつの可能性として実践の中で活用していく**ことを実践的な歴史観においては重視する。実践のための材料として過去を使用することで、その「保存」ではなく、「発展」が期待できるのではないだろうか。

過去を現在の状況下で発展させていく、その発展の連鎖によって歴史はより生き生きと持続していくのではないかと考える。

02 タイポロジーということ：タイプとトークン

多木浩二は、建築のタイポロジーを「タイプ」と「トークン」の関係性であると述べる。本提案におけるタイポロジーの理解は以下の理解にしがっている。

「われわれがバリエーションと見なすものは、タイプの個々の現象する形態（トークン）であり、それらを数多くつくることによってはじめてひとつの「タイプ」が現れてくる。ここでの坂本さんの方法は、このような意味でタイプ/トークン関係すなわちタイポロジーの実践であって、彼は建築のもつ建築性の可能な条件を、個々の住宅の意匠の中ではなく、「タイプ」に見たのである。トークンが増加すればするほど、タイプの存在がはっきりしてくる。タイプとは一種の抽象的な概念である。現象しているのはトークンだけである。」
(多木)



03 事物が持続するということ：保存と発展

「タイプ」と「トークン」の関係によってタイポロジーが形成されるというメカニズムから、タイポロジーの持続を「保存」する動きと「発展」させる動きというふたつから考えられるとさえ言えないだろうか。タイポロジー持続の保存による動きというのは、既存のタイプを保存することを目的とした持続であり、トークンの変更が認められないもの。一方、タイポロジー持続の発展による動きとは、既存のタイプαから派生した、新たなタイプβが生まれるような持続。あるタイミングで、既存のタイプから逸脱したトークンが生じ、その新たなトークンにバリエーションが生じることで新しいタイプが生まれるといった一連の過程を含むもの。

本提案では、**新たなタイプを成すトークンとしての「ノコギリ屋根」建物**を設計することが目的である。

04 桐生の「ノコギリ屋根」

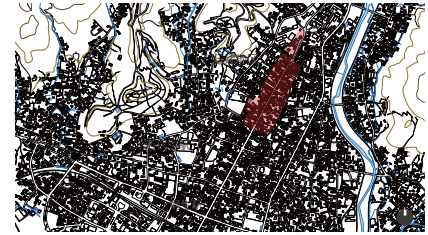
さまざまな用途で現在もノコギリ屋根が使用（再利用）されているが、ノコギリ屋根工場群によって生じたタイプからの逸脱が起きているような事例は無く、「保存」によってノコギリ屋根が持続されていると感じた。なので、さらに踏み込んでタイポロジーとしての「ノコギリ屋根」の持続を図るためには、「発展」による持続のあり方を検討するべきなのではないだろうか。



地域の特徴と課題

05 桐生市の伝建地区

桐生新町伝統的建築物群保存地区として指定されているのは、桐生市の本町一丁目、二丁目全域および、天神保一丁目の一部である。桐生新町は、天正19年（1591年）に徳川家康の命を受け、代官大久保長安の手代大野八右衛門により町立てされ在郷町として発展し、町立て当初からの敷地割りが残っている。当時から織物の生産が行われ、絹織物業を中心に発展した町の特徴をあらわしている。江戸後期から昭和初期にかけて建てられた近代の桐生を代表する産業である絹織物業に係わる様々な建造物が一体として残されており、多種多様な主屋や土蔵、ノコギリ屋根工場など、製織町として特色ある歴史的な環境を今日に伝えている。



伝建地区案内図

06 都市の構造的特徴

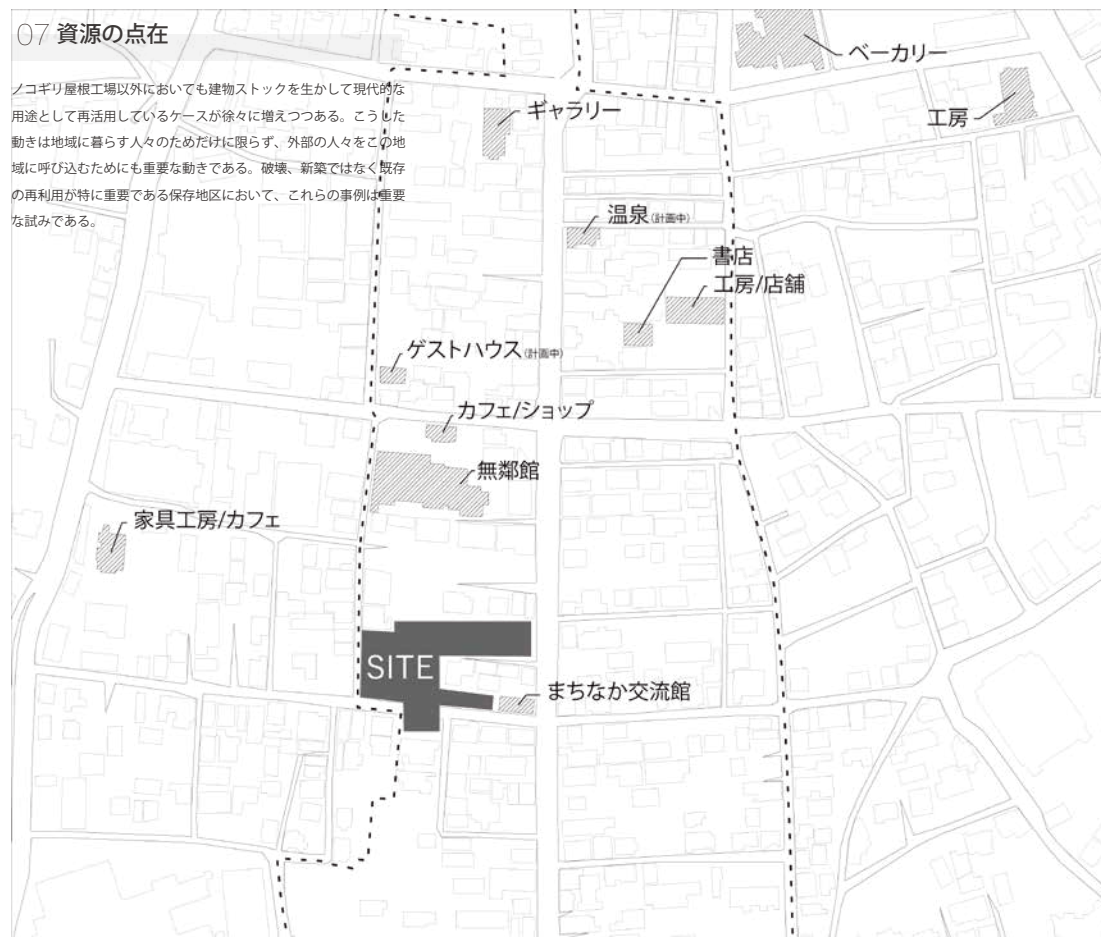
天満宮に至る幅約10m、長さ約1kmの本町通りを中心とした敷地割りを構造として有するこの地域には多くの魅力的な**路地空間**が生まれおり、路地を介して多種多様な様式や年代を表す建物群を縫っていくような歩行体験はこの地域での体験をより身体的で親密なものにしている。豊かな路地空間が生まれている要因は、町立て当時から大きな変更のない都市の構造にある。天満宮に伸びる本町通りから多くの枝が伸びるように細い道が地域を繋いでおり、街の中の歩行空間に豊かなスケールの幅を与えている。



縮図

07 資源の点在

ノコギリ屋根工場以外においても建物ストックを生かして現代的な用途として再活用しているケースが徐々に増えつつある。こうした動きは地域に暮らす人々のためだけに限らず、外部の人々をこの地域に呼び込むためにも重要な動きである。破壊、新築ではなく既存の再利用が特に重要である保存地区において、これらの事例は重要な試みである。



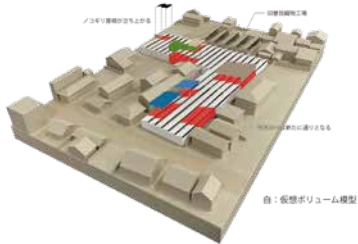
08 計画敷地

桐生市伝建地区のおおよそ中心部に位置する場所であり、旧曽我織物工場を含むL字型の敷地を対象計画地とする。歴史的建造物の再活用、伝建地区の活性化を目的とした場を形成する上でふさわしいと考え、計画地として選定した。



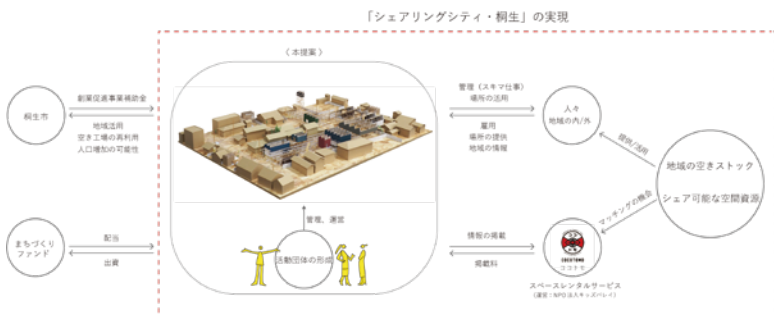
09 構成ダイアグラム

計画地全体にノコギリ屋根の巨大ヴォリュームを仮想し、その中でいくつかの用途をもった各ボリュームをつくるのは配置し、いくつかを間引いてみたりと操作を繰り返す。はじめに想定したボリュームをいくつかの要求にそってアーティキュレートすることを徹底させていけば何かしら新たな形で「ノコギリ屋根」建物が立ち現れるのではないかと考えた。



10 事業スキーム：シェアリングエコノミーの実現

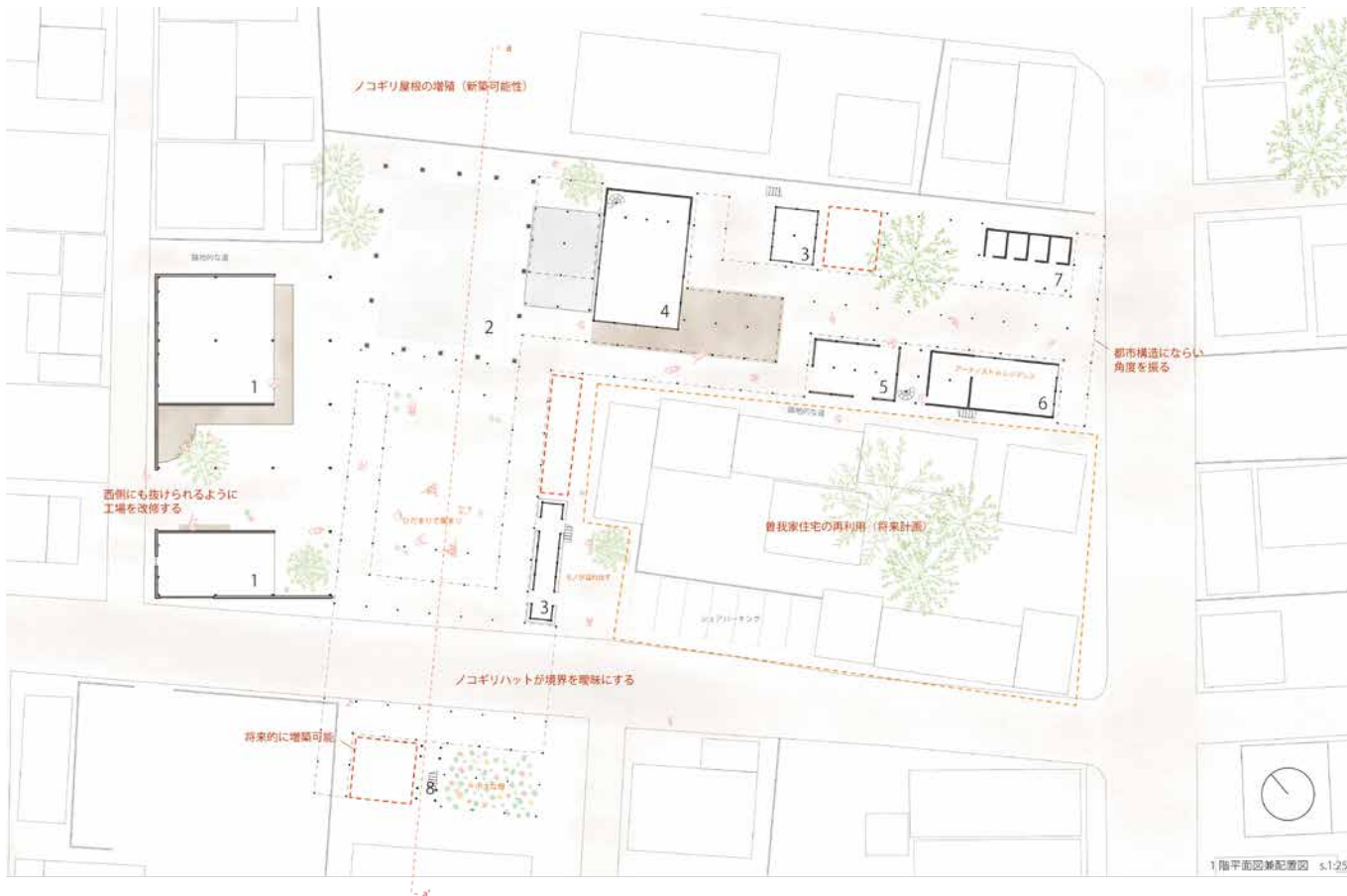
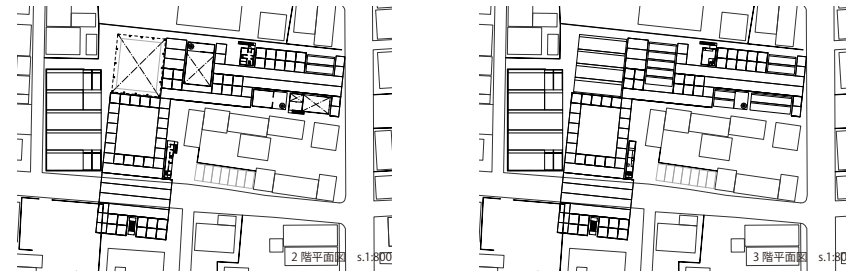
「シェア」によるまちづくりの一環として本提案を位置付けることで、伝建地区を中心としたエリアにおけるシェアリングエコノミーの可能性を探る。さぐる。



11 平面図

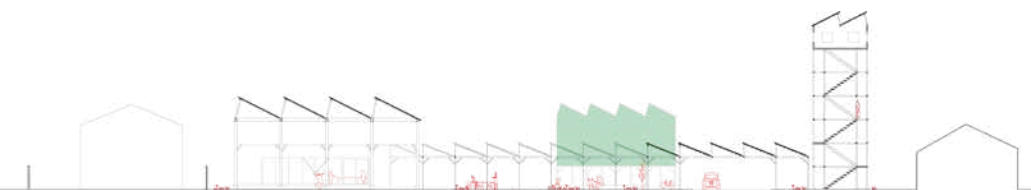
分棟配置によって全体を構成する。各機能を持ったノコギリ屋根の建物が点在し、その余白部分が人々の通りとなる。さまざまな利用を可能にするように多焦点的な場所が生まれるように建物同士の配置を考えた。隣地との塀や、隣家の外壁等との間に生まれてしまう隙間も路地として位置付けることで歩行空間に奥行きを生み出そうとした。

1. 工作室
2. 屋外スタジオ
3. 店舗+住居
4. 屋内スタジオ
5. コワーキング+ギャラリー
6. ギャラリー+アトリエ
7. トイレ
8. 展望台



12 断面図

遊歩空間を全体的に覆うノコギリハットにより各棟を繋ぐ。そのことで場所全体が敷地の外と、ノコギリ屋根の建物との間の中間的な領域となり、体験をよりグラデーション豊かなものにする。配置計画で生まれた空間のひだのような部分と断面計画で生まれた高さの違いによる場所の違いが桐生的な空間の奥行きを感じさせる。





高層から見る



まちに顔を明かせる



道路から見る



ノコギリウッドを通る



1階から見る



旧曾我屋物工場を通る道からみる



店舗+住居のノコギリ屋根建物



屋外スタジアムのノコギリ屋根建物